

随 想

インドでの私の買物体験

斉藤 宏

インドで生活した中で買物の体験は大きな比重を占める。その一部を紹介したい。

私は Sanjay Gandhi Post-Graduate Institute of Medical Sciences (以下、PGI と略) に赴任して1月後、バラナシヒンズー大学から私と前後してPGI に着任した K.N. Agarwal 所長の招きでバラナシ (Varanasi) [またはベナレス (Benares)] を訪れガンジス (ガンガー) 河を見に行った。河畔には露店があり、売り子がお土産を買うように呼びかけるので、記念に菩提樹の実の数珠を買った。売り子は30ルピーと云うのだが案内してくれた大学の人は「10ルピーでいい」と云うので「10ルピー」と云ったところ、それでOKだった。これがインドで最初の買物だった。ここから約10 km 北にサルナート (Sarnath) がある。ここは釈尊が悟りを開かれた後初めて説教 (初転法輪) された場所で鹿が居た事に因み日本では鹿野苑 (ロクヤオン) として知られている。日本人が多く訪れる仏跡なので、ここの物売りは日本人相手の商売に馴れている。車を降りるなり土産物売りにワーツと取り囲まれた。参道前広場にも露店商が手押し車の上に商品を並べてお客を待っている。子供の売り子が「これ安い」「20ルピー」「15ルピー」を片言の日本語でしつこくついて来る。苑内に入って英語のガイドを雇って巡りはじめたら1人の日焼けした男が近寄ってきて、「ここで発掘された古い仏像です」と掌の中でちらちら見せる。こちらが「No thank you」を連発しても追ってくる。ガイドも追い払うがまた近寄ってくる。ちらっと見せた仏像は意外に良い作りなので、つい「いくら」と云ったら「500ドル」と云う。「高い、いらぬ」と云うと「安くする。500ルピーでどうですか」と云う。なぜ10万円から急に4000円まで下げるのか分からないが、この調子ならもっとまけるだろうと思っていると、一挙に「300ルピー」と言い出した。更に200から100ルピーと下げて苑の出口近くでは「50ルピー」と云う。こちらは「いらぬ」と云ったら日本語で「いくら」と云う。同行した調整員がそれに乗って「25ルピー」と云ってしまった。そしたら売り子は「OK」と云う。車に乗り込んでも追って来たので25ルピー

なら200円だ。それなら一つ買っておこうかと思い25ルピーで買った。発車しようとするより更にもう1個の小さな仏像を出して「10ルピー」といったが窓を閉めて出発した。帰ってからよくみると5世紀のグプタ (Gupta) 朝時代に仏像彫刻がピークに達した頃の代表的仏像のコピーで光背などを欠落させ、焼いて黒っぽくし、あたかも古い出土品のように見せたものであった。(帰国後お坊さんに見せたら「良い物ですなあ、高価だったでしょう」と云われた) たしかに名品の模造ゆえ上品である。10月の炎天下に1日かけて歩き回り25ルピー稼いだ売り子はそれでいいのだろうかと思ったが聞くところによると彼らが1日生活するには10ルピーあればよいのだそうである。東南アジアからアラブ世界にかけては値切って買うものと聞いてはいたがこれほど吹っかけるとは思わなかった。インドに行った当座はルピーを円に換算しては安いと思って買っていたがインド人に「もっと安く買えたのに」と注意されたり、次第にルピー生活に慣れ、値引きも当然と考えるようになった。

渡印前インド通の日本人を知り、デリー (Delhi) に住むインド商人J氏を紹介してもらった。市の中心部に店があり、日本人観光客相手の商売をしている。デリーに出かけた時、J氏を訪ねた。J氏は「貴方の紹介者は私の特別の友人なので貴方には儲けなしで売ってあげる」と云い自宅に招き、市内を案内するなど歓待をうけた。私はカシミール (Kashmir) 絨毯がほしいと云ったら良い品を選んでくれた。絨毯の質はトルコが最高で、次がペルシャで、その下がカシミール製と云われている。しかし、カシミール絨毯にはすばらしいものがある。一般に市内の絨毯店では客が来ると絨毯を次々と床に延べて見せ、お客に「周囲を回って色と光沢の変化を見なさい」とうながす。ジュースをサービスしたり、「他店のは混紡だがうちのは本物」と云ったり熱弁を振る。中には絨毯の表面をカミソリでこそぎ取って燃やして灰の色を見せ匂いをかがせる。裏返して織り目を見せたり数えたり、お客に時を忘れさせる。

デリーの中心部ジャンパス通りには、インド各州政府が出している〇〇州 State Emporium と書いた店が軒を連ねている。ここからちょっと入った所に Government Cottage Emporium (Cottage とは「田舎の小屋で手作りの」と云う意味) と云う中央政府の直営デパートがある。全て定価が書いてあり安いのでインド人は勿論、観光客も安心して買物ができる所として有名である。しかし例外はある。ここの店の中の宝石店では「奥に良い品があるよ」と云って色々な宝石を出して見せ、急に小声になり「ドルか円で支払うならここまで値引きするよ」と云う。窓口を通さないで外貨を入手して差益を得て商品税分は値引きするらしい。そうして買ったとしてもその品がほんとうに安いのかどうか分

からない。政府直営のデパートでこんなことがあるとどこの店を信用したらいいのかわからなくなる。政府直営といっても、場所代を政府に納めて個々の商人が商売しているのが実情である。以前はここで宝石を売っていた商人がアショカホテルに店を出していた。彼は「政府直営デパートで高額な場所代を取られるよりは高級ホテルで店を出す方がいい」と云う。「良いお客が来るし良い品を売っている。日本にも店がある」などと云う。確かに、他の高級ホテルでも妥当な値で良質な物が並んでいた。

石工芸は日本よりインドの方が先進国である。アグラ (Agra) のツアーでも石工芸店はコースに入っている。石造建築も日本より発達していた。カシミール地方の木工芸には品質の高いものが多くデザイン的にも面白い。

南インド特産の木彫の象は置物にも地域性があり、象眼と木の質によって値が大きく異なる。インドの記念にはふさわしいと思えば腰掛けられるような木彫りの象を見て廻ったところ、「航空便で送らないと船便では暑いので割れる恐れがある」と云う。「到着後破損のないことを確かめてからお金を日本で払ってもいい」と云う店もあったがそれでも心配になったので買うのは止めた。

インドはミニアチュアール絵画で知られている。しかし、芸術的価値の高いものは少ない。マンダラは仏像の描かれたものと模様だけのとある。金糸入りマンダラは美しいが高価だ。インド各地では夫々の民族の特色のある工芸品があるビルマに近い東北インドや西インドの物産には色彩的デザイン的に勝れたものがあつた。絹製品は高価だが日本よりうんと安い。ベーズリー模様のネクタイは安く柄が良く美しいのだが中には芯のバイアスの取り方が悪くて振れるものもあつた。綿製品も安く、友人が買ったシャツは60ルピー (当時480円) で驚いた。だがよく見ると縞模様の線が左右段ちがいに仕立ててあつた。高級なサリーやカシミールのショールなどには値のつけようもない貴重品があり入手も難しい。渡印前にインド人に尋ねたら「洋画の材料は何でもある」と云っていたが、デリーやラックノー (Lucknow) でも日本の画材専門店レベルの店はなく、キャンバス、イーゼール、絵具の質は悪かつた。

電気製品、機械類は技術者も含めて問題は深刻であつた。PGIのJICA事務所にコピー機を購入したいと思つたがラックノー付近には業者は一社しかなかつた。新型機を買おうと思つたら近くのアイヨーディア (Ayodhya) で宗教紛争が起き「外出禁止になつたので新型は年内に間に合いそうにない。旧型なら近所にある。年内なら免税特典があるがどうしますか」と云うので旧型にしたのだが在庫処分役に役立つたのかもしれない。競争業者が居ないので仕方がない。契約の段になると業者は別件の契約書のコピーを見せて「こんなのをJ

I C A側で作りサインしてくれ」と云う。「契約書は印刷した書類に記入した上でお客にサインをお願いするものだろう」と云っても、「インドでは買う方が書類をタイプする」と云う。「おかしい」と云っても、P G Iの人まで「業者の云う通り」と云うので書類をP G Iの人にタイプしてもらいサインして業者に渡した。買ったコピー機は日本製で少々遅れたが納入され、機能上問題はなかった。

P G Iに着任して3ヵ月後、やっと空き家だった学長（Dean）の官舎に移ることになった。この家にはシャワー室が3ヵ所もあったのに浴槽はなかった。埃と汗と寒気に浴槽がほしかった。しかし、インドではシャワーが普通で浴槽は贅沢品なので高価である。大理石の浴槽は、王侯貴族、富豪が使う。私はせめて木の浴槽をと考えたが無いので強化樹脂製にした。それでも高価な買物なのに、店員には物を買ってもらおう気はないらしい。お客さんはそっちのけで、友人と話し込んでいる。彼らの話の切れ間を窺って尋ねると、彼は値段を示して全く値下げはしない。「栓がない」と云うと「別売りだ」と云う、届けてもくれずこちらがトラックを用意した。据え付け工事はしないでいいように据置き式の浴槽にした。据え付けの浴槽に水を入れたら漏っていた。そこで栓を抜いたら栓から鎖が外れてしまった。栓の裏を見たら、栓と鎖を繋ぐ金具がハンダよりも柔らかな金属様のものであった、引っ張れば抜けるのは当然であった。そこで日本から用意して来たコンクリートボンドとエポキシ樹脂で栓と鎖とを固定した。これで栓の中央部の隙間はなくなったがまだ水は漏った。栓が少々小さいので布を巻いて凌いだ。ところが新しく入れたボイラー（ギーザー geyser）は熱容量が不足して、途中から湯が水になる。そこでラックノーで補助ヒーターを買って来て加熱しようとしてコンセントに繋いだら火を吹いて切れた、開けてみたら裸線が交差していた。

帰国前、寒いので皮ジャンパーを買うために中央政府のデパートに行こうとしていた時、紳士が近づいて来た。聞くと政府のデパートの職員だと云い、名刺もくれた。そして、もっとよい所があるから案内すると云うので同行したら **Government Approved Cottage Emporium** と書いた所であった。体調不良で他を見廻る元気も時間もなくて皮ジャンパーを買ったが、あとで「約3割高い」とJ氏に云われた。買った店は単に政府が営業を許可した一般の土産物店だった。私の歩いたのは北中西部インドに限られている。南インドにはもっと素朴な人が居ると云う。私は渡印前に多くの本やインド人やインド通の日本人に接して或る程度の知識や情報を得ていたが現地で接したインド人の多くは時間にルーズで無責任だと思った。日本のプロジェクトが予定通り進まないのでフラ

ストレーションはつづのるばかりであった。かつての英国人同様、JICAの専門家達も待たされることに悩まされた。結局「ここはインドなんだ」とお互いに慰めあうしかなかった。しかし、インド人には時間の観念が無いと云われる一方、商人は比較的時間を守るようである。私は色々と失敗を重ねたおかげでインドは豊富な思い出の地になった。辛くて参ったインド料理をまた食べてみたいと思い、イライラすることの多かったこの地をまた訪れてみたいと思う。インドは摩訶不思議な魅力をもつ国である。

(河村病院顧問・前JICAチームリーダー)

